

三河アララギ

2019年6月 水無月 みなづき

六 月 号

第 六 十 六 卷 第 六 号



ニューヨーク日記(152) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Epicerie Boulud

Blue Shoe Diaries



NYには東京なみにグルメショップが沢山あるけど新しい所が開くとはりきって足運んじょうのよね。。。最近はNYの大物シェフ、ダニエル（ファストネームだけで誰でも分るくらい大物）がエピセリーボーリュドを開店！テリーヌとかチーズとか美味しそ〜。甘いお菓子もいいな〜夜はちょっと変わってオイスターバーに早変わりするの。会社の後でシャンパン&オイスターなどいかが？

NY has an abundance of gourmet shops but every time there's a new one, I can't resist paying a visit. And I certainly can't if Daniel is the chef opening one. So, happily I went to Epicerie Boulud. It all looks yummy. The charcuterie, the cheese, the pastries, the sandwiches, AND that's not all! At night, this place transforms itself into an oyster bar! How does an after work bubbly & oyster sound? super? bon!

目次

第六十六卷第六号(通卷七八六号)

表紙・マンゴスチン	今泉 由利 (1)	森 厚子 (23)	植村 公女 (33)
ニューヨーク日記(152)	Blue Stone (2)	山崎 俊子 (23)	杉浦 弘 (33)
アカンサスの徑	御津 磯夫 (4)	三田美奈子 (23)	今泉 如雲 (33)
ははきくさII	大須賀寿恵 (5)	水野 絹子 (23)	田中 清秀 (34)
歌集「續草々」	今泉 米子 (6)	現代学生百人一首	かさね吟行会
三河アララギ歌集	渥美 房雄 (7)	東洋大学	『酔いの徒然』(86)
「令和」の日	岡本八千代 (8)	福田陽向美 (24)	楽しい時間(79)
仕付糸	弓谷 久子 (10)	佐々木瑠奈 (24)	絹の話(103)
黒松盆栽	今泉 由利 (12)	岡本 美典 (24)	本田カイロブティック先生の春夏秋冬
右脳	阿部 淑子 (13)	小泉 和樹 (24)	「江上浩二の独り言」
初出勤	安藤 和代 (14)	福 正真 (25)	漢詩研修(三十二)
万葉集	清澤 範子 (15)	末永 星花 (25)	ドナルド・キーンさんと奥の細道
引継ぎ	伊藤 忠男 (16)	引地 佑香 (25)	沼津での牧水ゆかりの地を巡って(四)
花筏	森岡 陽子 (17)	竜口ひかる (25)	中屋 保之 (48)
泉橋	白井 信昭 (18)	森岡 陽子 (26)	鈴木 孝雄 (50)
たんぽぽ	杉浦恵美子 (19)	童謡 房総半島ひとめぐり	『歴代天皇御製歌』(百)
今美しき	山口千恵子 (20)	高橋 育郎 (28)	貫名海屋資料館(52)
雨よ降れ降れ	夏目 勝弘 (21)	田中 清秀 (30)	病床にて
『いこよせ』	いーはとぶ	浜田 紀政 (30)	今年の春に思ったこと
		柳田 皓一 (30)	御津磯夫短歌鑑賞
		重野 善恵 (31)	「水魚」のことから(221)
		山迫 京子 (31)	岡本八千代 (57)
		山元 正規 (31)	編集室だより(二〇一九年四月)
		森岡 陽子 (32)	今泉 由利 (58)
		松本 周二 (32)	野菜・まんだら(16)
		今泉 由利 (32)	「三河アララギ」について
			(60)

アカンサスの徑

御 津 磯 夫

醫學など無かりし長き永き日の迷信とわれはけふも戦ふ

動きゆく道をゆめみしもはるかにてわがゆく道はわが足に歩く

千冊の書積^{ふみ}み乱るる砦の中たてこもりつつうらやすくゐる

とざしたる瞼のうへにさく花のさくら明りの映えつつねむる

ひと隅はしづかをのこし谷汲の石にかづらののびもこそすれ

根尾川の音もきこえず葉ざくらのなかにて寒し無人の駅は

夕光のながるる川は澄みながらなほ遠々し根尾のうす墨

谷汲の奥のふかきに山ざくら散りつつをらむこの夕風に

紅梅ののこりて朱き實を採らむ去年刺されし蜂の巢の枝

垣幡をしらずしばらく考へてああ杜若ともよめるではないか

ははきくさⅡ

大須賀寿恵

賜ひたる湯呑に玄米の茶をつぎて辞書を引きつつ原稿を書く

F、B、C大賞受けし中学よりアキランサスの花の一箱

秋の空蒼しと思ふ時ありて吾がスモン病の癒えつつゆかむ

十年経て知覚も常ならむ肋とりしあとおりをりに撫づ

芙蓉の実春に蒔かむと井尚万の海見ゆる庭に吾が拾ひ来し

筋委縮のきみの歌稿を書きてゆく未だ手の動くスモン病吾は

昨日より吾の左のポケットにかすかに鳴れる芙蓉の実二つ

お茶を汲み酒の爛つけ鰯をさき今日一日の勤務くれたり

炭火埋め薬罐に水をつぎ足して火鉢のぬくみをたしかめている

粥を炊くわれの土鍋は碓水嶺を越えゆきし日に拾ひ来しもの

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

今年はまだ引馬野の夏の祭禮の笹竹も踊りの笹も奉るなり

窓の下に欲しきものあり指さすは折鶴蘭の小さき白花

隈笹より取り来し蟬の蛻ぬけがらに二日遊びて帰りゆきたり

午後三時はやく夜顔の花開く夜會草にて白き装ひ

くつわ蟲鳴きゐし庭の草叢にしとどの露のひかりゐる朝

朝の汁夕べの魚にしたたらす香具の木の實の青青カボス

天目に焼くと言ひつつわが庭の土佐萬作の秋の木の葉を

球根を埋めたるあたり忘れつところどころの曼珠沙華の花

忘れ得ぬ言葉ひとつにのぼりゆく三千院へ黄葉の徑を

船石を見て蓮華寺をたちいづる銀の蓮華の散華ひとひら

三河アララギ歌集

渥美房雄

車窓の左ほのしろく見ゆるはオホーツク海か遠々に来て我は^み睹にけり

草枯れし丘たひらかに海をかぎり凹地を占めて人家群れたり

うつそみの口より抜かれし大白歯ふたつに割れてわが前にあり

十五糶に満たぬ沙羅の木この樹そだちて咲く日の来むかわが^よ生のうちに

ゆくりなくけふ往き還る跨線橋うしなひし時を呼ばむ術なく

百合の花活けたる部屋に一夜寝き眠れる間も^{ひま}百合は匂ひて

夏ごとに足に水むし出るならひ軍に受けきて今に遺れる

對外賠償の支拂終れば税金もいくらか減らむかああ二十年先

資本主義あと十五年はもつとありわが残年といづれか長き

理想社会のヴィジョンまばゆく描けると幻滅報ずるといづれ信ぜむ

「令和」の日

蒲郡 岡本八千代

春ふけて久しぶりなる陽の光などかわたくし心明るし

年号の「令和」となる日近づきてそはそはとするわれの不可思議

ああつひに我が生まれし日を白状す昭和元年五月一日を

倖^{しあは}せと思へば倖^{しあは}せ「令和」の日迎へつつ友と語りつつあるも

「令和」近し庭の卯の花しらじらと去年^{こぞ}と同じき処に咲きつつ

忽ちに庭の千草も伸びだしてハコベラスギナ風草そよげり

庭隅の小さき小さき竹藪^{ことしと}の竹悉くに花が咲きたり

竹の花その茶褐色のうなだれて今日吹く春の風にゆれをり

昔父が竹の名前はクロチクとか言ひゐしことを思ひ出しつつ

「雨ふらば傘さして来よ」を思ひつつ竹の花に降る雨を見てをり

もし夫が竹に咲きたる花見れば何と言ふぞやかにかく言ふかも

何にしても竹に花咲くはその命了はるとありぬ「植物記」には

十年ぶりに隣組班長の巡りきて務めねばならず務まるかしら

あるがままの私^{わたくし}なれど老いたるは老いのしをらしさ欲しとも思ふ

過去のこと物語るやうに話しする大人になりし孫とのこの夜半

仕付糸

豊川 弓谷 久子

花見にと誘はれ迎えの車待つ三年ぶりぞ心浮き立つ

人混みを避けし配慮も嬉しくて子等と入り行く中央公園

足元はたんぽぽの花満開の桜の下にて暫し憩はむ

咲き満ちし花に酔ひたる心地なり今一番の見頃の花か

二つ三つ落花拾ひて手帖にはさむ今日の花見の小さき記念

大木の桜並木を車窓より眺めつつ行く西尾街道

自画自賛子の始めての園芸仕事チューリップの花咲き初めにけり

雪の舞ふニユースもあれば真夏日となる日もありて四月は忙し

はなやぎし昔の祭り憶ひをりひつそり暮れゆく今日の祭礼

老拙は病みて死にたり春雨が一日しとしと降りし夕べに

庭隅に子が埋めやりぬ十五年飼ひたる猫のなきがらを

仕付糸付きたるままの着物解く仕立て直さむ子の洋服に

さまざまの世を生き抜きて来たるかな昭和六十年平成三十年

残年は未知なればこそと歌はれし寿恵先生の年に近づく

心静かに日々にてあればそれでよし十連休も関はりも無し

黒松盆栽

東京 今泉 由利

スツキリと機敏に移動群雀やまもも雄花も散り尽したり

今日よりは孤独ではない贈られし三河黒松盆栽とある

盆栽はボンサイサイズに保たむよつやつや伸びる新芽摘み取る

アカネ科のネルテラ属の苔珊瑚南米原産といふを親しむ

吉野山奥千本の崖伝ひ西行庵へのぼりゆき着く

とくとくと苔清水の落つる音西行法師ここにをられし

みづからの無事安穩の保たれて彫り続けゐる釈迦如来像

ほんのりとほほえみくださるお釈迦様ほほえみながら彫り続けゆく

おのづから速足となり「うとう坂」夏立つといふ今日の爽やか

皇居・国会議事堂・富士山・一望にしてスカイツリー展望

何も居ぬか小さき水槽みてをりぬ今日誕生の水くらげ居た
スカイツリー天望回廊に見定めし道を辿りてわが家に帰る
初夏の太陽あまねしすがすがしコーヒーマスの新芽輝やく

右 脳

横浜 阿 部 淑 子

池の端の古木に拡がる桜花スタッフに守られ今年もお花見

池の面さざ波立ちてカモメ飛ぶ桜花おうか屏風に集合写真

せわしなき一日終えて一人聴くニニロツソの音色に右脳とろける

国際の電波望遠鏡の連携で初撮影のブラックホール

はやぶさ2リュウグウ地表の表面にみごと作製人工クレーター

皐月号の表紙に映る飛魚は令和の未来祝して輝く

初出勤

豊川 安藤 和代

満開の桜トンネル人の波夫よそちらももう春ですか

日輪の色柔らかに春を告ぐ百合の芽つくつくつくつくつく

春の野に園児の列の長ながと列におくれし二児がかけゆく

初蝶の葉裏にひとつ羽たたみ花冷えの日をじっと耐えおり

雀の声聞かなくなりて寂しめば遠く鴉が啼き合っており

若き日の吾の職場をバラ色に思い出させて園児の列ゆく

美しく老いたしなどは夢のゆめ足腰肩に湿布六枚

初出勤孫のスーツはよく似合う嫁の遺影がほほえみてをり

新聞の人事異動欄君の名が「次長」とありて何度も見つむ

小学で幾度も登りし石巻山新緑まぶしくパワーいたたく

選挙戦終えたる朝をながながと犬眠りおり初夏の風

昨秋の台風被害もここにありスカンポも細く夏を迎うる

万葉集

春日井 清澤 範子

新元号「令和」と決りて万葉の卷五梅花の歌よりにてうれしくなりぬ

初夏の令月にして気淑く風和ぎ夫の蔵書「万葉集」にて確かむ

繁田川の水はかすかに流れゐる深みに新緑の桜葉写す

一日を最善尽して湯にひたる外は雨音確かなりズム

面接に頑張る娘を励ましぬ夜は静かに更けてゆくなり

磯夫先生の「錦木」読む夜幾度か歌の添削赤きペンにて

歳老ひて庭の剪定出来ざれば庭師頼みて納得の夫

桜木の赤く落ちたる萼をふみ葉桜見上げ夫と歩くも

昨夜来風雨は強し庭椿の花皆落しなほも風吹く

四分咲の桜堤防の橋に触れるをひと花摘みてグラスに浮べぬ

移り行くバスの窓から山桜めでつつ病院へ夫と娘と

派手になったと母からもらひしブローチを着けて病院へのバスに乗り込む

引き継ぎ

大阪 伊藤 忠 男

杖を付き砂利道歩く山の道
我が背を押すか鶯の声

庭先の牡丹一輪どこからか窓
開け朝の楽しみになる

そば長野肉は松坂広島のカキ
はその地に行きてこそなり

セーターを急ぎ取り出し着替え
する慌ただしきや花冷えの朝

こんぴらの歌舞伎に時代の流れ
あり分かりやすさが存続の道

いつ見ても絵画に勝るしまなみ
も精錬ガスに産廃の跡

宇野を立ちガイド案内で金刀比
羅に夕日まぶしき観光列車

背を屈め引き抜き根からつまみ
取る雑草なれど心苦しき

次の世で壁を造らず橋を架け一
つの世界望むは夢か

我も又気持ち新たに夢の花咲か
す気概に駆り立てられる

花筏

東京 森岡陽子

大達とのんびり過す春の午後好きなコーヒーポンプドールのパン

花盛り若者集う目黒川片手にスマホ片手にワイン

古木桜博物館の庭に咲く東寺の仏像いちぼくづくり一本造

川沿ひの桜祭りのぼんぼりに明りが灯り芸名浮ぶ

花筏エスの字作り流れ行く太くなったり細くなったり

浮かび出る大口開く池の鯉人の気配を追い掛けて来る

満開は人人人の桜道今は葉桜木洩れ日差し込む

春愁やバス待つ間々に公園のベンチにかけて写真誌めくる

白鷺は川の浅瀬にただ一羽深みを泳ぐ鴨は群なる

泉橋

豊川 白井 信昭

潮風を花壇に凌ぎき一本のゼラニウム今日ビニール外す

ベランダよりさす朝光り二階部屋廊下の戸にも届くその光^{かげ}

唐突に週末の宵ラグーナの打ち上げ花火わが家に響かふ

クルーズ船ダイヤモンドプリンセス号初めての蒲郡寄港心待ちおり

見晴るかす三河湾なぎ巨ひなる豪華客船沖つ方航^ゆく

平成のみ代も僅か新しい元号決まるらし今日の昼近し

かの橋は花岡岩にて昔日の石橋度々通りにき我ぞ

いつごろか記念館に移されしかの日かの時今も忘れじ

記念館も医院も通るまがり角泉橋の碑歴史を語る

アパートに屈き玄関に飾りあり五月人形また吊し雛

たんぽぽ

蒲郡 杉浦恵美子

出典は万葉集と云ふよりは、大友旅人の唐への憧れ

出典は観梅宴の序にありて、文雅彷彿令和の元号

万葉集見るため敢へて取り出だす夫の蔵書のぼろぼろ文庫

我が夫が少年の頃読みけらし所々に付箋の文庫本万葉集

我が夫は憶良に心を寄せたるか付箋いとほし文庫本万葉集

鬱屈を抱へし今朝は桜より路傍のすみれ心引かるる

道端のたんぽぽ百個摘み居りぬこれにて蜜を作らむがため

籠の中百個のたんぽぽふうわりと今しも春を湧き立たせてる

透かし見ればたんぽぽ蜜の黄金色春を封ずる小瓶の中よ

ねえこれが何だか分かる我が友にたんぽぽ蜜を味わせたり

うんそうね微かに花粉が香ってるたんぽぽ蜜を友読み取りぬ

たんぽぽが齎し呉れし春の午後友との語らひ穏やかに過ぐ

今美しき

豊川 山口千恵子

露ゆでてみどりの皮をはぎてゐる意外に多き皮におどろく

草丈伸びず短きわがシレネ春なればピンクの花を咲かせゐる

眠りにおつ瞬間われにはわからざり朝になれば目ざめてをりぬ

君子蘭の苔にかすかに赤き色茎の伸びきて花咲くを待つ

つかの間をはなやぐ牡丹の紅の花ためらひつつ一花切りぬ

ふさふさと小麦の畝のもり上がるわが田の麦を見て通るなり

花咲きてそちここに氣付く桜の木一年に一度存在示す

くばられしピンクの造花門に立て春の祭りのはなやぎにけり

花ニラの白き花々ゆらしつつ寒の戻りの風の吹きゐる

黒土のひびわれは芽出づるきざしなりとこころ芽出づ馬鈴薯は

木下陰に一かたまりに二人静今年も芽生える季を忘れず

窓の辺の楓の若葉の淡みどり色増してみゆ今美しき

雨よ降れ降れ

豊川 夏目勝弘

竹の子の出づる季節に大地をば潤すまでの雨なく過ぎゆく

雨雲が三河湾にて上下うへしたに分かれて東三河を避けてゆくなり

久方の天あめより雨の降り始む大地を潤す恵みとなるや

人びとの生命いのちを繋ぐ水なりきダムの貯水率は十パーセント余り

今日もまた雨かと恨みしも幾度ぞ今はひたすら雨雲を待つ

雨に烟る山並もまたよし今はただ雷雨を伴ふ豪雨がほしい

庭草の伸びの遅きは良きなれど雑草にては大事にならぬ

集落の集会所にて村人の集ひ雨乞ひせしは七十余年前

村人の輪のなかにて踊りにき歌の文句は覚えておらず

雨乞ひにて雨の降りしをただ一度おぼろ朧の記憶のなかに

雨乞ひの秘術を持たずひたすらにひまわりよりの情報が頼み

新緑に向ふ森に山やまに雨よふれふれ雨の降れ降れ

『いっよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

春の来て収穫終へしわが畑は今すいせんの花盛りなり
春休み孫待ちわびる夫とわれに一日のみの帰省の便り

牧原規恵

身長の半分程のランドセルに夢いっばいか孫は新一年生
わが庭のツツジの蕾に降り注ぐやさしき雨よこの催花雨は

稲吉友江

耳もとに「秦琴」の音の残りしまま帰る今宵の十三夜の月
ひと月をもやもやとして過ごし来し私のパソコンやうやう動く

鈴木美耶子

中の間は雛座敷となり賑やかなり幼は五歳に赤きべべ着て
日本橋渡り三井家の雛に会ふ姿美しき市松人形は国宝

吉見幸子

白き台の齒科院のごとく並べられ核入れ道具は静かに光れり
身も玉も取り出されしあこや貝すでに全部が韓国輸出と

牧原正枝

携帯の充電終りの知らせがありましたと返事するわれ

黄水仙今年も咲けり寄り合ひて主なき家の庭にゆれをり

石田 文子

植ゑ替えしキンモクセイは以前よりあるかのやうに桜のそばに

久々にチャイコフスキーをきくわたしワインレッドもグラスにゆらして

森 厚子

小学生の卒業の日孫婚袴姿にいよよ華やきて

今日もまた海の辺に来て開きてゐる岩打ちつづく潮の鼓動を

山崎 俊子

わが孫のスマホデビューの第一報「希望の高校受かりました！」

中学と高校に進むわが孫等それぞれに咲くさくらの花かな

三田 美奈子

その才に衝撃受けしあの頃に我を戻すかクイーンのシネマ

事も無げに我のこの脚八十迄保たば可と言ふ若き医師よ

水野 絹子

現代学生百人一首

東洋大学

定期券ピツと鳴ったら始まるよ昨日と違う新しい日が

ノートルダム清心中学校二年（広島県）

福田陽向美

電車内Jアラートが鳴りひびく君の笑顔がゆがんで見える

ノートルダム清心中学校二年（広島県）

佐々木瑠奈

一ミリが命を奪う線になる妥協しないで大切に書く

広島県立広島工業高等学校一年

岡本美典

木材に適した加工をしてみるとその木が喜ぶような気がする

広島県立広島工業高等学校一年

小泉和樹

とび作業単管触るとじわじわと伝わってくる太陽の温もり

広島県立広島工業高等学校三年 福^{ふく} 正^{しょう} 真^ま

土砂災害祖父母を亡し哀しんだあれから家族絆は強し

広島県立総合技術高等学校一年 末^{すえ} 永^{なが} 星^{せい} 花^か

測定の初日患者を目の前に聞こえてきたのは私の脈拍

広島市医師会看護専門学校医療高等課程二年 引^{ひき} 地^じ 佑^{ゆう} 香^か

かすみ草込めた気持ちは照れかくし母への手紙にそっと押し花

山口県立岩国商業高等学校二年 竜^{たつ} 口^{ぐち} ひ かる

贈呈誌

森岡陽子

冬雷二〇一七作品年鑑十自選合同歌集

○出石^{いすし}なる旧き芝居小屋訪ねたり奈落におりてからくりをみる

飯嶋久子

○三日月と宵の明星並びおり茜の上のうす青き空に

乾義江

○秋日和沈む夕陽の木洩れ日が一点刺すやう鋭く光る

及川智香子

○戸を開くる部屋に朝日の差し込みて沖上げの風潮の香運ぶ

佐々木せい子

○空蟬を葉裏に宿し北向きの山茶花のはな真白きが咲く

立谷正男

月虹 127号4月

○大鷹にあらじと望み倦まざるは城跡の空めぐる鳥影

○枯れ芝の丘に土竜の穴あまた黒々つづき春は間近に

水上信子

○花かくしの雪の静けさ曲折のひとつふたつを人は秘めもつ

保坂征子

鹿児島アララギ 4月号

○窓ごしの光あつめて透きとほる桃色シクラメンの花びら反りて

有島道子

○海棠のかたき蕾のほぐれ初む雪なき冬をよろこぶ如く

中山タマエ

○お花見の日取りを定めし三日前染井吉野は徐に咲く

市来房枝

冬雷 4月号

○玄関の鍵探しあぐねて三日間日差しに光る草叢のなかに

関口正道

○冬ざれの庭を飛びたつ鳩の羽白き光を散らし去りゆく

永田夫佐

○日差し延び外葉は小さきキャベツの芯の葉は早や巻き込みはじむ

青木初子

○たなびける紫雲を焦がし昇りくる初日をがむ息を整へ

嶋田正之

房総半島ひとめぐり

高橋育郎 作詞

1 大きな海を 眺めてみたい

そんな気持で 旅立ちだ

右は内房 東京湾で

左 外房 太平洋

でっかくゆこう でっかくゆこう

房総半島 ひとめぐり

2 はるかに海の 呼ぶ声きけば

胸の高鳴る 水平線

ここは館山 鏡が浦で

向こう洲の崎 灯台岬

のびのびゆこう のびのびゆこう

房総半島 ひとめぐり

3

若い潮が 寄せくる浜で
いつか駆けだす 青春だ
月の沙漠の 御宿海岸
夢がひろがる 理想郷
思い出つころう 思い出つころう
房総半島 ひとめぐり

4

君は去らずの 木更津あたり
茂原たなばた 願い星
水辺に萌える 夾竹桃の
夢をかなえる 千葉の巷
（まち）
幸せつころう 幸せつころう
房総半島 ひとめぐり

『俳句』

囀や暗き茶室の白障子

田 中 清 秀

飛石に歩幅くるはす花海棠
春愁や小雨いとはぬ対の狛

囀りや女同士の登山道

浜 田 紀 政

江ノ島の階段多し春の月

解体の庭にぼつんと花海棠

熱き茶をゆるり啜るや花疲れ

柳 田 皓 一

花満ちて風あればまた散りにけり

咲き満ちて花一輪の美しさ

三つ編の分けめすつきり入学式

重野善恵

ひと群の遠足が行く青信号

さくら咲く復興徐々の震災地

囀を聞き分けてゐる共白髪

山迫京子

平成の春惜しみ待つ次の御代

平成の平和な御代の終る春

泡一つ浮かせて堰の水温む

山元正規

囀や村美しく明けにけり

囀りに取り出す野鳥図鑑かな

珈琲にミルク一滴花の昼

森岡陽子

初蝶の脚の触れたる水面かな

囀は背中を追うて聞え来る

果てしなき蒼穹ありて落椿

松本周二

均らされし畑地巻き上ぐ黄砂かな

山吹の一重の色に混りなし

花びらは散りて積もれり裏表

今泉由利

山吹や実のなきことを確かむる

清明の朝のひかりのそのなかに

盲導犬目線の会いし花の下

植村公女

風生れて夕広がりぬ花大根

江戸彼岸桜満開多摩御陵

大仏の肩より低き若葉山

杉浦弘

雉鳴くや小太郎石のうしろにて

前山の朝ほととぎすつづけざま

渦を巻く米代川や山覚める

今泉如雲

ひしやげたるガードレールや八重桜

初花や弘前工業高生徒

かさね吟行会

「横浜三溪園」 四月

田中清秀

仏塔は古代インドにおいて仏舍利（釈迦の遺骨）を祀る為に造られたと言われ、日本では三重塔や五重塔の楼閣形式の木造塔が多い、七重塔は東大寺に、九重塔は百済大寺と法勝寺に建てられたが今はない。色彩鮮やかな層塔が深い緑の木の間からみえる景観はなんとも日本人の詩情に訴える。今回訪れた横浜の三溪園には室町時代に京都木津川の燈明寺に建てられた三重塔が移されており、関東地方にある木造の層塔では最古のものである。正門から入ると小高い丘の上に、立派な宝珠を載せた宝輪の層塔が真っ先に目に入る。そして正面の大池には逆さに三重塔と咲き残る桜が映る、朽ち舟が浮かぶ水面には鴨や鷺の野鳥が漂い、春風が僅かに吹き渡っている。

一舟を景に万朶の桜かな

朽舟をわが家としたる残り鴨
置き傘で池をぐるりと花の雨

正規

清秀

紀政

明治から大正にかけて製糸・生糸貿易で財を成した原三溪（富太郎）は東京湾に面した三の谷と呼ばれる谷間に広さ五万三千坪の日本庭園を造り上げた。ここに京都や鎌倉から集められた歴史的建造物十七棟を移築して、広大な敷地の起伏を活かし配置した。また、芸術や文学などの文化人とも広く交流し、多くの芸術家の育成と支援に貢献した。前田青邨、横山大観、下村観山らの日本画を代表する多くの作品が園内で生まれている。また、明治三十九年には庭園を無料開放し市民の憩いの場としている。

当日は生憎と春雨がそは降り、用意された置き傘を借用して庭園をめぐる。四季折々の自然と調和した庭園には、多くの草花が植えられておりサクラをはじめヤマブキ、ユキヤナギ、シャガ、ツツジが其処此処に咲き始めていた。これから初夏にかけてはアジサイやスイレン、ハナシヨウブが咲くという。

雨降れば花山吹の灯りけり

層塔をぬらす小雨や春惜しむ

花屑に野良猫戯るる雨の中

周二

陽子

さち子

園内の重要文化財のひとつ臨春閣は紀州徳川家の別荘

だった巖出御殿で、紀州徳川家から八代將軍となった吉宗が幼少期に遊び育った建物と言われている。内部の障壁には狩野派の襖絵が淡い墨色で見事に描かれている。開け広げた大広間は外気にさらされており、襖絵が傷むのではないかと心配したがこれは本物のそっくりにつつた複製画で原本は三溪記念館に保存されているのとこのと、取り越し苦労であった。また、ここから見る仲秋の満月は三重塔と居並び美しい景観を演出すると言う。機会があれば一度訪れてみたい。

さらに石段を登り詰めると金毛窟という三溪が建てた一畳台目の極小の茶室がある。千利休の待庵と同じ広さで、三溪もここで賓客をもてなしたに違いない。他にも春日局ゆかりの聴秋閣、織田有楽斎の作と言われる春草蘆など、重要文化財が幾つか有りボランティアの解説員が訪れる観光客を丁寧に案内してくれる。

花の雨ぼつぽつとぬれにけり

由利

冴返る残りしまの指の棘

素山

平成に別れ惜しむや飛花落花

京子

三溪記念館には三溪自筆の書画を始め、ゆかりの芸術家の作品や美術工芸品が展示されている。さらにロビー

の茶席望塔亭では菓子と抹茶が一服五百円で楽しめる。ここで内池の錦鯉と層塔を眺めながら休息するのも一興である。また、園内には、他に三箇所茶寮、茶店もあり小腹を満足させることができる、また、茶会や句会に貸し出す施設があるので、予約が取れば楽しいかも知れない。

一巡して正門に戻り、来た時と同様にタクシーに分乗して根岸駅まで戻る。予約した駅前のレストランで昼食をとり、ここで引き続いて素晴らしい庭園と古建築を思い起こしながら作句に取りかかる。いつもの三句出し四句選で名園鑑賞の吟行を無事終えた。

■かさね吟行会■

日時 二〇一九年六月十四日(金)

場所 古河庭園

集合 古河庭園入り口十一時

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（八六）

丸山 酔宵子

『阿蘇のミシユランニツ星』

平成28年4月16日、突然襲った熊本大震災。破壊された熊本城の復旧は肅々と進められているが、巨大なクレーンが聳え立つ天守閣の姿は痛々しい。

熊本城入口にある加藤清正ゆかりの加藤神社から、城内お濠周辺全体に立ち入り禁止のフェンス設置され、修復作業の為残念ながら近くにはいくことはできない。しかし、わずかに残された壁や柱を見れば、地震の凄まじさが想像される。近くの広場に設置された広大な一角には、崩壊し崩れ落ちた石垣が、整然と並べられ、よく見るとひとつ一つの石には、丁寧にきちんとした数字が記されている。

桜も散り始め、蒼く澄み渡った陽射しの中、熊本城を後にして雄姿が遠く霞む阿蘇連山へ。県道45号線をひた走って行くと、阿蘇の姿がくつきりと眼前に迫ってくる。

しかし、雄大な緩やかな曲線が魅力の山肌が、至る所で大きく崩れ、因幡の白うさぎのように茶色い土が剥き出しになっている。大地震後の二日に渡る豪雨で緩んだ地盤が総崩れし、阿蘇大橋ともども崩落したのである。

あれから三年、阿蘇高原の中を走る「ミルクロード」も開通し、外輪山の尾根筋を快適にひた走る。名前どおり周辺は牧場が多く、延々と続く草原には菜の花も咲き、軽快なアップダウンが火口付近の大観峰まで続いている。

大観峰から北へ下って行くと原生林の中に点在する阿蘇温泉郷がある。湯けむりの立つ溪流の流れる坂道にひとときわ鄙（ひな）びた集落が見えてくる。これこそ、ミシユランニツ星を獲得した「黒川温泉」である。

1986年（昭和61年）までは、田舎の温泉宿としてうらぶれた状態あったが、30軒の黒川温泉旅館組合を若手組織に再編し、「一軒で儲かるのではなく、地域全体で黒川温泉郷を盛り上げたい」と景観づくりと魅力の創造に着手したのである。

まず取り組んだのが、200に及ぶ乱立した看板の撤

去と洒落た統一共同看板の設置。そして、スギ山だけで殺風景だった温泉郷を「絵になる風景にしよう」と剪定や植樹。極め付きは、山里の立地を活かした野趣に富んだ露天風呂の整備が進められ、黒川の全ての露天風呂を利用できる「入湯手形」を発案発行し、「露天風呂めぐりの黒川温泉」というブランドを全国に広く発信したのである。

溪流沿いの小道を歩けば、各国語が飛び交い、ツンツルテンの浴衣がけに手ぬぐいをぶら下げ、雪駄を「カラコロ・」鳴らしながら、湯上りで火照った顔で歩いている。将に、温泉町全体が一つの旅館、小道は中廊下、それぞれの旅館は客室なのである。

湯けむりをくぐり飛び去る燕かな

酔宵子

楽しい時間 79

山本紀久雄

2019年4月30日

神にならなかつた鉄舟・・・その九

明治神宮外苑に建つ聖徳記念絵画館は、平成23年（2011）に重要文化財に指定され、この絵画館の中に80点の壁画（縦3メートル・横27メートル）が整然と並んでいる。

そのひとつが、山岡鉄舟が重要な役割を担った江戸無血開城をテーマに画家・結城素明が描いた『江戸開城談判』である。

絵画館の内部空間は、中央の大広間から左右両翼に回廊があり、正面向つて右翼側（東側）の第二画室と第二画室に日本画40点、左翼側（西側）の第三画室と第四画室に洋画40点が並んで展示されているのであるから、「美術館」と称されてもよいと思われる。

しかし、ここはあくまでも絵画館なのである。それは成り立ちの特異性にある。通常、美術館や博物館はコレクションが存在しており、その収蔵ほかを担う建物として社会的に要求されたという性格が存在する。

だが、聖徳記念絵画館は施設を建設しようとした時、まだ展示する絵画を持たず、これから制作しようという手順で進められたものであるから、美術館や博物館とは、その成り立ちの性格が異なる。それゆえに絵画館に位置付けられるのである。

『明治聖徳記念学会紀要復刊第11号』（林洋子氏論文 平成6年4月）は以下のように絵画館の絵についてこう酷評する。

《これらは決して同時代のベストメンバーらによつて描かれたのではなく、芸術の領域から離脱したような「紙芝居」のような作品が大半となっている》

林氏は美術品とは認められない作品が並ぶと主張する。しかし、この絵画館の壁画は「とても無視できない歴史画」と認識せざるを得ない。

それを指摘しているのが川井知子氏の『明治神宮聖徳記念絵画館研究』（哲学会誌第21号平成9年11月学習院大学哲学会）である。

《自らの史料的価値を標榜した絵画館目論見は、成功しているといつてよいだろう。「壁画」は、視覚的メディアを通じて、絵画館の外へと拡散、増殖し、各所で機能していくことになるのである。「壁画」の拡散は、師範学校で用いられる国定国史教科書の挿図として用いられことに始まる。そして現在でも、「壁画」は多くの書物に「史料」として、あるいは「史料」と見まがうような形で掲載されている》

《絵画館の「壁画」は、教科書をはじめとした、日常的に、不特定多数の人々に触れるメディアによつて、「作られた歴史」から、「疑うべくもない正史」となつてきたのであり、今後も「史料」として用いられる限り、「正史」として振る舞い続けるであろう》

その通りで、『江戸開城談判』も教科書に掲載され、「正史」として扱われているのが現実実態である。

もう少し聖徳記念絵画館の特徴について検討してみたい。

角田拓明氏は『聖徳記念絵画館の美術史上の存在意義再考』（『神園』第15号 平成28年5月明治神宮国際神道文化研究所）において以下のように述べている。

《当時の展示施設と比較したとき、絵画館は美術館というよりはむしろ明治後半に隆盛を見せたパノラマ館に類似することが容易に想像されよう》

《大画面絵図、建築空間内での二覧性といった特徴がパノラマ館にはあり、明治30年代の日本で流行した理由は、特に日清日露戦争などスペクタクルを現前化することにあった。その主要な担い手のひとりが、壁画画題考証図を描いた二世五（二）姓（せ）田（だ）芳（ほう）柳（りゅう）だったことも奇妙な縁である》

このように聖徳記念絵画館の特徴は、ギャラリ―機能を持つ絵画館であり、明治後半に隆盛を見せたパノラマ館に類似するといふのだ。

では角田氏が「奇妙な縁」という二世五姓田芳柳が、画題に応じた『下絵』と『画題考証図』の描き手となった背景要因には何があったのだろうか。

これについては横田洋一氏が『明治天皇事績をめぐって―二世五姓田芳柳と岸田劉生』（近代画説・明治美術学会誌）平成12年12月）で以下のように述べている。

『二世芳柳を絵画館の嘱託にするに当たっては明治美術会の出品以来、彼が歴史画に長けていたこと、パノラマなどで大型のドラマ性の強い作品を制作していたこと、特に明治44年農商務省の嘱託として英国に渡り、日英博覧会で日本の古代より現代に至る風俗変遷図を描いたことなどが採用の要因となったと見るのは当然であるが、最も強い要因として「天皇像を描き続けた二門の伝統を受け継ぐ二世芳柳」をあげたい』

この芳柳一門の伝統については以下のように述べている。

『聖徳記念絵画館と二世五姓田芳柳との結びつきの主たる要因はいわゆる五姓田派が明治7年の初代五姓田芳柳の「明治天

皇像」以来、天皇像を描き続けたことにある』

《初代芳柳が描き、五姓田義松（長男）も皇后を描き、五姓田勇子（渡辺幽香・娘）も父の模写であるが天皇像を描いた五姓田一門、その一門の誉れ高い正統な方法を二世は完璧に受け継いだ。昭和になっても明治天皇及びその一代記を描き続けた。昭和六年の二世芳柳の個展にも明治大帝の御一代記を出品している。さらに芳柳は明治天皇事績画だけの作品で関西方面を巡覧する展覧会をおこなっているというから、かつて芳柳・義松親子が浅草奥山でおこなった油絵見せ物興行に相通じるところをまだ持ち続けていた》

この二世五姓田芳柳が描いたパノラマ絵が、日本赤十字社東京支部の1階に展示されているということを知り、早速、日本赤十字社東京支部にお伺いし、許可をいただき筆者が撮影した。額の下部に《大正15年フィラデルフィア開催米国独立百年記念展覧会出品「関東大震災当時の宮城前本社東京支部臨時救護所の模様」五姓田芳柳氏 画》と記されている。252.5cm×317.5cmの大きさだ。



二世五姓田芳柳と日本赤十字社との関係は、二世が日赤特別社員であったため、絵画の制作を何度か依頼した作品のひとつがこのパノラマ絵で、長らく日本赤十字社の本社に置かれていたが、平成3年（1991）東京都支部が新築され、展示場所として相応しいということで修復の上展示されたものだといふ。

絹の話 (103)

「アトリエテレビ」今泉雅勝

絹の来た道 これからの道 (その3)

絹の軍事利用

古代から絹(生糸)は美しい織物として権力者によって多用されて来ました。

ところが、長繊維である生糸は繭の20%~30%しか採れず、残りは屑糸となり、紬として庶民にも利用されて来ました。紬は蟬の羽根の様に薄く艶やかで、霧の様に柔らかくとはなりません、軽くて丈夫で温かく、夏でも蒸れず、寒冷にも凍結しにくく、緩衝性にも吸水性にも優れていて、気持ちとを和らげます。その様な素材を権力者が見過ごす訳が有りません。

繅衣 繅甲冑

中国の殷、周の時代になると大陸の中で派遣争いが大規模になり、青銅製の兵器等の金属兵器から兵士を守る為、大量に生産され始めた繭から得られる絮(真綿)や屑繭から兵士の外装や兜を手軽に大量に生産し、軍事に

利用され始めたのです。鉄兵器の時代になっても清の時代に至るまで利用されて来ました。

漢時代の墳墓の兵馬俑の服装をお思い出して頂ければ解りやすいですが、唐の時代には紙絮(絹の屑を紙に漉いた物)、明の時代でも綿甲(繭を濡らして木鋸で紙のように薄くした物をタイル貼りの様にベースの生地になで打った物)が盛んに使われていました。

清の時代になると、繅衣に菱形の鉄甲板を鋌でとめた武官鎧が作られていたという記録が有ります。

ローマ帝国の兵士もシルクロードからもたらされた繅衣めんいを着て戦ったところ、敵の矢を防いだという話が残されています。

蒙古軍「絹と羊毛のフェルトで世界制覇」

蒙古では羊毛は沢山とれますが絹は生産されません。絹の機能性を知ったチンギスハーンは万里の長城を超えて中国に侵入すると「先ず銀を奪うべし、次に絹を奪うべし」と命じ、奪った絹を羊毛と混ぜたフェルトを作らせました。(羊毛と真綿を大きな恵方巻き(のり巻き寿司)のように簀巻きすまきして水をかけて馬で平原を長時間曳き回して作る)

これは強力な防矢性を発揮するばかりでなく、軽く軽快で戦闘性が向上し、野営する兵士には防寒に役立つばかりか絹の抗菌性による皮膚病等の予防になり、馬の疲

労も和らげ、行動距離が増し、兵士の士気はグンと向上したのです。

特に黄河より南は羊毛フェルトの軍装では夏期の駐屯は暑くて不可能でしたが、絹羊フェルトの軍装は温度が上がり過ぎず南下を可能にして、タイ国境にまで進出し、東ヨーロッパにまで制覇する事が出来たのです。

鎌倉時代日本に襲来した時の蒙古兵は絹羊フェルトワンピースとブーツ、先頭兵士は金属兜ですが、後方兵士は縣甲冑でした。この時の戦闘の様子を記した当時の記録に「蒙古兵は射れども射れず、斬れども斬れず」とあります。

蒙古の元は絹を利用してアジア大陸を制覇したと考えてもよいでしょう。

日本の絹生産 「刀と戦争」

日本では7世紀白村江に出陣する兵士に縣甲冑を付けさせた記録が有ります。

鎌倉時代、元弘の役の苦戦に懲りて、絹が斬れる刀を作らなければ蒙古兵には立ち向かえないと考えた時の政権は絹が切れる日本刀を作ることに心血を注ぎ、軟鉄に玉鋼を巻き鍛えて、反りの研究を重ね、五郎正宗をして、日本刀を完成させるのです。

戦国の武將は、刀傷を少しでも防ぐ為と、鎧の中の熱や汗、臭いを和らげる為に、平面繭（蚕に繭を作らせず、

平な広い所に蚕を置いて和紙の様な絹を作らせる）を着用したと云われています。

日本が絹生産世界一の時代

昭和10年台になると、絹は輸出総額の45%前後になり、このお金で軍備を拡充し、第2次世界大戦をアメリカ、イギリス等連合国と戦争をすることになったのです。

その時、日本の航空兵は暖房のない機内で身体を冷やさなため絹のマフラーを首にしっかり巻き付けて搭乗していました。落下傘もさりと開かせるため絹で作られました。北支派遣軍の冬の軍装に軽くて暖かく、緩衝性に優れたエリ蚕が使われました。

これからの絹の軍事利用

昨今世界中で軍事用に研究されている絹は「蜘蛛の糸」です。蜘蛛の糸は蚕の絹より優れた機能性が多く、特に張力は蚕の糸よりはるかに勝っています。

現在は軍事用防弾チョッキ製造が期待されていて、集団で飼育出来ない蜘蛛に代わって、蜘蛛の糸の遺伝子に組み替えられた家蚕に蜘蛛の糸を量産させようとしています。また、大腸菌に蜘蛛の糸と同じ物を作らせる事に成功したようです。

絹は今後もっと多方面に利用されて来ると思われます。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2019年5月1日

5月1日

今日から新元号です

そして

ゴールデンウィーク真っ只中ですね

あいにくの空模様が続いていますが

休日の空気感は

ゆっくりしていいですよね

ゴールデンウィークということでは

遠方の患者さんが多く

いらっしゃって下さいます

笑顔があふれ

こちらまで元気をもらいます

そんななか

胃腸の不調

寝つきが悪い

朝方1度起きると寝れない

肩首の痛み

肩甲骨の痛み

などの症状が多く出ています

寒暖差が大きく影響しています

腹八分

湯船にしっかりとつかる

温かい飲み物

寒いと感じない様にする

などを気をつけ

身体を冷やさない様にしていきましょう

2019年4月15日

再び乳酸菌 ①

季節の移り変わりに感動しつつ

身体や心の不調が出やすい

4月と6月

この時期は1年で1番不安定ですよ

自宅で出来る健候法ですが

乳酸菌により

今回は腸内環境を整える

方法を書きたいと思います

乳酸菌といいますが

ヨーグルトですが

とにかく種類が沢山あります

しかも

人によって合うあわないがあるんです

例えば 有名なR-1

インフルエンザに有効性がある

といわれていますが

100%ではありません

どうやって自分にあっているか

見極めるか？

まずは1週間

同じヨーグルトを朝晩摂取してみてください

それによって

便通が快便なら合うということですよ

次回も乳酸菌です

「江上浩二の独り言」 18 江上浩二

消費者としての我が身とエネルギー政策との接点

学生時代（1975年前後）漠然と日本のウラン核分裂による原子力発電が目され、どんどん増えてくるなという環境をうすうす感じていた。専攻が材料、それもセラミックスを主なテーマとする学科で、原子力関係へは進まなかったが、極めて強い放射線環境下での炉材材料の劣化研究など含まれていた。大学院へ進むため所属した研究室ではゼミ勉強会として当時現場で活躍していた専門家の先生方の話を聴く機会も多かった。その中で原研の専門家で、溶融塩型高温増殖炉が理想的で、夢のエネルギーが得られるというバラ色の話があった。今になってそんなバラ色は消え失せた。

1978年に社会へ出て就職すると、私は半導体材料担当だったが、核融合のうち磁場によるプラズマ閉じ込めに続くレーザ光による次の核融合を目指す、高強度のレーザ光を発振させるガラスレーザ光システムの開発を就職した企業の他部門が進めていた。自分に近かったのは酸化物結晶によるレーザ光発振を開発している部門で、後に実際に使わせて頂き半導体薄膜（マイクロンレベ

ル）の加熱処理を進めた。昨今では高強度パルスレーザ光による大型材料加工（厚膜鉄板の切断）の実用化、医療分野への応用がなされ、1980年ごろに開発取り組みをした欧米のチームが2018年のノーベル物理学賞を受賞した。それにしても40年弱の時間が経過している。

話を戻そう。就職した部門での他分野研究として、1980年当時、始められたばかりのシリコン薄膜太陽光発電セル（ソーラーセル）の試作も行った。現在の再生可能エネルギー政策として風力発電とともに重要な位置づけをされている太陽光発電の黎明期であった。この時のシリコン薄膜は低温度で形成され、水素分子が多く含まれる所謂アモルファス状のものであった。その後ポリシリコンとともに液晶ディスプレイを駆動させるトランジスタデバイスにも使われた。

それから齢を重ね、省エネ・脱二酸化炭素ガスを御旗として、ハイブリッド車とか家庭にもソーラーセルを導入という機運が国内外で作られてきた。初めてハイブリッド車を手にしたと、友人の中でも物好きなのやつが、わざわざメールで連絡してきた。また、吃驚したのが実家の兄が新築した実家の屋根にソーラーセルを載せたことだった。都市ガスの配管が来ていない神奈川県のある実家はプロパンガスを使っており、オール電化にし

て、ガス代節約を標榜し、多額の投資をした。そこにはちゃんと裏があり、国や地方自治体が助成金を出し、普及を図る仕組みに、兄が乗ったのだ。

数年して、2011年3月11日の東日本大地震が発生し、日本のエネルギー政策が根底からひっくり返った。2018-2019年現在でもふらふらしている。実は原発が停止し、計画停電もされたが、運よく、東京山の手線内に住んでいたので、真っ暗な夜を過ごすことはなかったが、翌2012年の末、自宅へもソーラーセルの設置工事を行い、2013年初頭から太陽エネルギーの直接恩恵を受けることになった。弟の私も国や地方自治体の助成金システムを利用して頂いた。現在も劣化もなく発電を続けているが、年間の推移をみると天候に大きく左右されていることがわかる。発電量変動にして15-20%であり、これはお天道さんが良く照っているとか照っていないとか、飢饉を起してもいいくらいの変動である。気温や降水量もあるが光なくして光合成は進まず、即食糧難と関わってくるものだ。

2005年、27年間のサラリーマンを辞めて、自営のコンサルタントになったが、業界支援として活動しているときに、前にも書いた風力発電に世界的に巨額の投資がされ、直径50メートルを越える風車が国内でもあちこ

ちで目に付き増加しており、その風車の羽根の歪を、ある光技術でモニターするデバイスに関わった。海外の風力発電量は大きく、国内は小さい。本当に大風が吹くと羽根が壊れ、インフラ設備の風車自体も倒壊する事故も起きている。仰々しく国のエネルギー政策の議論はしないが、ワットの蒸気機関が発明され、化石燃料を大量に消費し始める産業革命以降、増え続ける大気中の炭酸ガスの上昇を抑えようとする大義が各国にあって、持続可能再生エネルギーの開発導入が原子力発電とバランスしながら、推進されてきた。

ところが2011年の東日本大地震による原発の被災を契機に、コストが安いといって石炭、天然ガスによる火力発電が代わって前面に出されてきた。化石燃料の需要増大で価格上昇がもたらされ、シェールガスの高い採掘コストの元がとれると理由で米国がシェールガス埋蔵量トップで米国はエネルギーの輸出国のポジションを得ることになった。中東やベネズエラの石油産出国の取り巻く環境変化、エネルギー産出が低下してきたロシア、価格高騰の原油の大量輸入で貿易赤字増大の日本と、世界のパワーバランスの変革が進む現状を平成最後の日に独り呟いている。

漢詩研修 (三十二)

千代田岳精会 平井茂行

竹里館 ちくりかん

独坐幽篁裏 ひとざすゆうそうのうち

深林人不知 しんりんひとしらず

彈琴復長嘯 だんきんまたちやうしやう

明月來相照 めいげつきたあひそ

獨坐幽篁裏

彈琴復長嘯

深林人不知

明月來相照

【作者】

王維（六九九？～七六一）高級官僚で盛唐を代表する詩人。太原（山西省）の人。画家、書家、音楽家としての名も馳せた。字は摩詰。最晩年の官職が尚書右丞であったことから王右丞とも呼ばれる。若くして俊才の誉れ高く、二十一歳で進士及第。詩風は、曲雅、靜謐と評せられる。琵琶の名手でもあった。又、家族思いで兄弟仲が良く、熱心な仏教信者で、三十歳のころ妻を亡くした後、一生再婚しなかったという。官位は昇進と挫折を経験、特に安祿山の乱では一時賊軍に捕らえられ。大きな挫折を味わった。四十歳を過ぎた頃、長安の南東の溪谷、輞川わづかの地に広大な別荘地を手に入れ、余暇には親交の裴迪はいでと共に此処に籠り、詩を作って琴を弾じ、仏教を論じて楽しんだ。別荘地内の景勝地に夫々名称を付け、それに因んだ詩が「輞川集」と題して残されており、此の詩はその一つで、竹林の中の館で、自らの楽しむ様を詠じたものである。

【語釈】

○幽篁・・・静かな竹藪。奥深い竹藪。○裏・・・うち、なか。○弹琴・・・琴を奏でる。○長嘯・・・声を長く伸ばして詩を吟じる。○深林・・・深く茂った林。○明月・・・晴れた夜の月。○相照・・・照らす。相互に照らすという意味ではない。

【通釈】

旅静かで深い竹藪の奥（にある館）に独り座って、琴を奏で、又声長く詩を吟じている。この深い林の中のことを知る人は居ないが、明月だけが訪れて照らしてくれるのである。

『ドナルド・キーンさんと奥の細道』

中 屋 保 之

日本に帰化した文化人として真つ先に浮かぶのは、出雲国にかかる枕詞の「八雲たつ」に因むとされる小泉八雲（出生名 パトリック・ラフカディオ・ハーン）であろうか。近くは、日本文学研究者のドナルド・キーン、ウェールズ生まれの作家でナチュラリストのC・W・ニコルなどが挙げられる。

そのドナルド・キーンさんが二月二十四日に九十六歳で亡くなった。

少年時代にN・Yの書店で手にした『源氏物語』を機に日本文学への道に進んだキーンさんの名著に「百代の过客 日記に見る日本人」があるが、奥の細道の稿に『奥の細道』の中で、おそらく私に最も訴えるところの多いのは、多賀城（註＝現在の宮城県多賀城市）にあった日本の古代城柵の「つばの碑」を見たあとの述懐であろう。（中略）そして興味あるものとはいえない。しかし芭蕉は、まぎれもない千年の昔、聖武天皇の御世からの記念物が眼前にあることをさとり、深く心を動かされる。（中略）それからしばらくして、彼は「三代の榮耀」の城を訪れ、そこで杜甫の有名な句「国破レテ山河在リ、城春ニシテ草木深シ」を思い出している。そこに腰をおろし、いにしえの戦の情景に思いを致し、「時のうつるまで泪を落とし侍りぬ」と書く。そしておそらく彼の最もすぐれた俳句「夏草や兵どもが夢の跡」の句を詠むのである。

多賀城において彼に最も強く訴えたものは、もはや完全に消え去ったものでも、いまや「夏草」に変貌したものでもなく、まだそこに形を留めているものであった。」と記している。

むかしよりよみ置る歌枕、おほく語伝ふといへども、山崩れ、川流れて、道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代変じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す（確かめる思いだ）。行脚の一徳、存命の悦び、羈旅の勞をわすれて、泪も落るばかり也。

キーンさんは、芭蕉が山河や、生い代わる木々に表れる永続性をも疑問視し、「国破レテ山河在リ」ですら疑ったと断じている。《そこに描写された景色はすべて、見る影もなく変貌したというのに、世に日本語の読める人間が存在するかぎり『奥の細道』は残るであろう。》と、時代の変遷とは一線を画した名作への尊敬の念を表しているように思われる。

そしてこの稿の最後を《月日はまことに「百代の过客」である。しかしそれもひとえに、この永遠の、だが天文学的には意味をなさぬ事実人に心を向け、言葉の美によって、その深長な意味を保ち続けてきたからにはほかならない。何百霜も隔てたその昔に書かれた日記が、今ここにある。文学という芸術への、これ以上に壮麗な捧げ物が、他になにかあるだろうか？》と結んでいる。

『奥のほそ道』を何度も読み、矢も立てもたまらずに平泉にやってきたキーンさんは、平泉を訪れた時の印象をこのように残している。

「私は日本にきてからすばらしい仏像に夢中になって、これこそ絶対的な美だと時々感じたことがある。広隆寺の薬師如来などがそうであった、だが、震えるほど美に打たれ、自我を忘れて、この世でない世界に入ったと感じたのは、中尊寺の内陣を見た時だけである。」

また、昭和五十九年九月の「東北文化シンポジウム 平泉」（主催岩手日報社）で盛岡にきた時、そのことを振り返って、「芭蕉の俳句の中で、いちばん感激するのはどれかと言われたら、高館にのぼれば……として詠んだ『夏草や兵どもが夢の跡』です。そして、芭蕉がたどった跡をたどってみて、一番強い印象を持ったのは、やはり平泉でした。」と語っている。

平成二十三年の東日本大震災直後に日本国籍を取得、同年秋には中尊寺を訪問し、講演の中で「昭和三十年に初めて中尊寺を参詣してから現在まで、日本の事を考えない日はおそらく一度もありませんでした」と語って私たちを感動させたキーンさんの日本名は、鬼怒鳴門（キーン・ドナルド）とし、鬼怒川と鳴門海峡に因み、わざわざ「怒」の字を二度読みさせるというユーモアをも持ち合わせた人でもあった。

キーンさんはかつて、作家の司馬遼太郎氏との対談の後、連れ立って二人で御堂筋を歩き、南御堂の前で芭蕉翁終焉の地の石碑の傍らで、芭蕉がこの地で生涯を閉じたことやその後の時代の移り変わりについて語り合ったそうである。

そして「私が、長年の夢がかなって日本にやって来たのは、昭和二十八（一九五三）年のことです。京都に二年間留学し、近松門左衛門について博士論文を書きましたが、同じ元禄時代に生きた井原西鶴や松尾芭蕉にも、やはり深い関心をもっていました。だからその後コロンビア大学で日本文学を講義するようになった際には、私は教材として芭蕉の『奥の細道』を用いました。その理由は、芭蕉は私にとって、時代や文化を超えて共感できる非常に近い人間であるからです」と語っている。

芭蕉は、五十一歳の人生を終える少し前、元禄七（一六九四）年九月に大坂を訪れている。

此道や行人なしに秋の暮

亡くなる一ヶ月余り前の句。最晩年の心境そのものであり、事実上の辞世の句とも見られている。

その二日後の句

秋深き隣は何をする人ぞ

秋が深まってきて、ふと、「隣の人は今、何をしているのかな？」と感じてしまうという人懐かしさを表している。

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

芭蕉は、元禄七年九月二十九日夜から下痢を発病し、病床に就く。十月五日に、之道亭が手狭だったため南久太郎町御堂前の花屋仁右衛門宅離れ座敷に移った。そして、十月八日深更、舂舟に墨を摺らせてこれを作句した。

（参考文献 ドナルド・キーン著 金関寿夫訳

百代の過客 日記にみる日本人 その他）

沼津での牧水ゆかりの地を巡って（四）

沼津 鈴木孝雄

病名は急性腸胃炎兼肝臓硬変症、現代風に言えば、アルコール性肝硬変だったであろう。死の一日前には昏睡状態に至ったが、酒を飲んで元氣付けた。また、末期の水に代えてお酒で唇を湿して永眠した。葬儀の日まで三日あったが、残暑にもかかわらず、ほとんど異臭はなかったと伝わっている。まさにアルコール潰けの状態になっていたのであろう。

牧水は酒を愛したがゆえに「酒の歌人」と称される。自身で記した「酒と讃と苦笑」には、それまでに詠まれた短歌がまとめて載っている。その中から、味わい深い歌を抜粋してみる。

それほどにうまかとひとの問ひたらば

何と答へむこの酒の味

白玉の齒にしみとほる秋の夜の

酒は静かに飲むべかりけり

酒飲めば心なごみてなみだのみ

かなしく頬を流るるは何ぞ

語らむにあまり久しく別れぬし

我らなりけりいざ酒酌まむ

酔ひ果てて世に憎きもの一もなし

ほとほと我もまたありやなし

牧水の歌碑は全国に二六〇余あるが、第一号は、没翌年の昭和四年に、千本松原の千本浜公園に建てられた（図一の④）。重さ一五トンの大きな自然石は富士山の裾野から運ばれた。毎年一〇月第三日曜日に「沼津牧水祭・碑祭・芝酒盛」が開催され、歌碑に刻まれた

幾山河越えさり行かば寂しさの

はてなむ国ぞ今日も旅ゆく

を詠いつつ、「牧水」などのお酒を酌みあい牧水を偲ぶ。
写真に碑前祭の様子を示す。

お酒の好きな方はご存知でしょうが、八月二四日は「愛
酒の日」。これは、牧水の誕生日にちなみ制定された。
死してなお愛飲家に牧水の名はしっかり刻まれている。

沼津ゆかりの歌人牧水の記念館を、との声が市を動か
した。集められた約六千万円の寄付金が沼津市におさめ
られ、昭和六二年に、千本松原の東端に市民の手によつ
て「沼津市若山牧水記念館」が建設された（図一の⑤）。

記念館の裏手には千本浜、そこからは駿河湾、富士山
が見渡せる絶景の立地。館内は沼津在住時代を中心に、
牧水の足跡、原稿、掛け軸、書簡などが展示されている。
また、会議室が設けられており、歌会などに利用されて
いる。

（おわり）



牧水祭

「歴代天皇御製歌」(百)

貫名海屋資料館

徳川時代、天皇に学問(漢学)と和歌をおすすめし、政治から追放しようと試みるが、天皇がたは「敷島の道に」精進された。

後水尾天皇御製

うけつぎし身の愚さに何の道も廃れ行くべき我が世をぞ思ふ
これをだに人に見えむもつつましきやそぢの後の敷島のうた

靈元天皇御製

朝なく神の御前にひく鈴のおのづから澄むこころをぞ思ふ
敷島のこの道のみやいにしへにかへるしるべもなほ残すらむ

光格天皇は千四百四十余首の御歌を残され、仁孝天皇は六百九十余首の御歌を残され、幕末の孝明天皇の御代になる。

孝明天皇御製

さまぐになきみわらひみかたりあふも國を思ひつ民をおもふため

澄ましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ國民

國学の祖と契沖は、無住法師の歌論の繼承者であり、「萬葉集」の研究、神道・儒教・佛教の三道を貫くものが和歌であると。

加茂貞淵は、契沖を継いで「萬葉集」の復興に全力をささげ、和歌の原理・古代精神は「まこと」にあると信じた。本居宣長は、古典の学問と和歌創作とを、日本人の学問の第一歩とした。

明治天皇は孝明天皇に集約せられた歴代天皇の遺志をつがれ、王政復古、明治維新を実現された。

正岡子規、「萬葉集」「古事記」にあらわれた古代建国精神を復活し、洒落、理窟を排して、まごころの表現を根本とした。

副島種臣たねおみ、西郷隆盛は漢詩や書にすぐれ、和歌も立派であつた。

明治以来の学問は、一般に西洋の科学を追うことに急で、和歌を中核とする日本の学問の伝統とは離れてしまった。「敷島の道」は皇室に伝へられ、大正天皇『御製詩集』『御製歌集』があり、昭和天皇は、一貫して和歌を詠まれ、國民をみちびかれた。

昭和天皇御製

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

國がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

「病床にて」

大橋 望彦

今日も朝から良い天気で、家の中に閉じ込められているのが残念に感じるし、それもこのような時に病室という閉ざされた部屋で何もせずに暮らしているのは、実は数年以前から、次第に悪くなってきた腎機能の低下でどうしても人工透析をつづけなければならなく、いままです通っていたクリニックも三か月経つと出された。奥多摩のような人工透析の施設のない土地に一人住まいは無理であるという周りの人たちの判断で、青梅の養老ホームという施設に入れられたのである。無期限に入院することが出来るという好条件である。そもそもこのホームは、近くにある小作クリニックという透析専門の病院の院長が同じ経営者であり、システムなど全て病院と同様の施設である。人工透析を一生治療するが、ほぼ一日おきに施療しないと、尿毒症に罹り死に至る。この介護ホームは全て個室であるが、この部屋には手洗いも洗面も施設がなく、部屋からの出入りは必ずナースコール（呼び出しベル）で呼び出した介護人の付き添いが必要である。これは例えばトイレに行くのに、患者が倒れたり転んだりして怪我でもされては責任問題になるからであるという理由からである。

腎機能はそんなに敏感なものとは思ひもしなかったのだが、その機能障害が徐々に進行したのだらうか、気が付いた時には既に遅く、機能を十分に果たせなくなってしまう、人工透析の厄介にならざるを得なくなってしまう。幸にして、之は一生快癒しないことから、罹患と診断されてから

直ぐに国家から身体障害者の一級一種の判定がされて色々の支援がつくようになった。実は、私自身が奥多摩町の身障者相談員（現在、私一人が町から委嘱されている）であり、このような心配事をしているのも、致し事ないことではあるが、若し、手続きの仕方や、どの窓口に行けば良いのか判らないと云うことであれば、とも角も福祉課に行つて相談することである。

話は、病床を離れてしまったが、こんなに一日おきに除水して、食べた食事の全てが、水となって吸い取られているのに、体重は減らず、反つて胸水が溜り、心臓が肥大して来て、次第に呼吸が苦しくなり死に至る。その様な状態にならぬには、水は極力飲まないことしかない。服薬するにも極端なことで云えば何滴かの水で飲むように成る。これはもう悲劇である。

今日は休日であるが、妹はちっちゃな会社の社長さんをしていて、休みの日はむしろ忙しい。それを無理に引っぱりだして買い物に出かけた。ここでも、妹は見張り役である。まず最初に、近くの大きな電気店に行きコンピュータ用のプリント用紙をたんまり仕入れる。メモしておいた品物を次から次と探し求め、最後に兼ねてから欲しかったブルーレット・ディスク・リコーダー（大容量の収録器、それに今まで収録した録画ディスクの再生も出来る）が二日間の大安売りをしていたので、遂にそれを求めた。妹は着くと荷物を部屋に運ぶと直ぐに、仕事の続きがあるのでせつせと帰って行った。仕事を後回しに兄貴に付き合ひ、車椅子を押しての買い物だけに疲れただらう感謝しています。でもこちらは浮き浮きしてリコーダーの組み立てに取り掛かったのです。

今年の春に思ったこと 夏 目 勝 弘

毎年春になると、先ず思い浮かぶのは万葉集卷八の（志貴皇子の喜びの御歌一首）。（大意は、土屋文明の万葉集より）
1481 石はしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春に
なりけり

我が家の北三百メートルの沢を流れる小川があり、本宮山に向う山道に、二間ほどの橋がある。その下が垂水になっていて流れに沿い数枚の田がある。その畔に春になるとツクシやワラビが出る。

今は上流の沢を埋められ広場となつてしまった。夏になるとサギソウの群生が見られた。ホタルの乱舞する清流が懐かしい。今は大腸菌五千倍の汚れた流れになつてしまった。

鏡王女の歌一首

1419 神なびの石瀬の森の呼び鳥いたくな鳴きそ我が
恋まさる

（大意・神なびにある石瀬の神の森の呼び鳥よ、ひどく鳴くよ。私の恋がまさるよ。）

呼び鳥は鳴き声が、人を呼ぶように聞える鳥、カッコウなごを指す（広辞苑より）

松の若葉が伸び始める頃マツケムシが出て若葉を食べてしまう。庭師にとつて厄介者である。毛虫の天敵はカッコウ類のみで、一般的な、ムクドリ等は捕食しない。

当地域には、カッコウ等は来ないため、毎年どこかの庭で、被害にあう。

山部宿禰赤人の歌一首

1431 百済野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけ
むかも

（大意・百済の萩の古い枝に、春を待つと、とまっていた鶯は、

もう鳴いたであろうか）

昨年の十一月の庭の手入をしていた時に小鳴していたウグイスだろうか、今年は例年より一週間早く背戸の松原で鳴いていた。

大伴宿禰家持の鶯の歌一首

1441 うち霧らし雪は降りつつしかすがに我家の園に
鶯鳴くも

（大意・天を人もらして雪はふりにふる。しかしながら、私の庭には鶯が鳴くよ。）

大伴坂上郎女の歌一首

1445 風交り雪は降るとも実のならぬ我家の梅の花に
散らすな

（大意・風とともに雪はふるとも、まだ実にならぬわが家の梅を、花のままに散らすな。）

万葉集の時代は、梅の花の咲いている時季に、雪が降った。

厚見王が久米女郎に贈った歌一首

1458 宿にある桜の花は今もかも松風いたみ土に散らむ
（大意・君の家にある桜の花は、今にもまあ、松風がひどいので、地に散るであらう。）

五月一日より平成が、令和になるとニュースになり、万葉集からとの発表があり、書店では万葉集に関連する本が、売れに売れたとのこと。一過性のことは思うが、思いの短歌を目標している者にとっては、嬉しいことである。

万葉集の時代には、梅の花の咲く頃に、雪が多く降ったようである。

今年、桜の花の時節に雪が降り、箱根などでは満開の桜の花に、雪が積っている映像が流れていた。

時代の千年三百年と時代が変化しても、人間の心は、何も変ることはない。

人間の思いは、時間の変化に、かわりのなく不変であると思う。

御津磯夫短歌鑑賞 18

「月虹」 鮫島 満

庭師らのすみたる木の間を歩みゆき枯枝いくつわれは剪りとり
『月下の華』 昭和五十八年

前号で私は、御津（今泉）家の庭は「植えたもの生えたものが多く、手入れを怠るとやっかいなことになりかねない様相を呈していたのではないか」と想像を書いた。そのような庭には状況に応じて庭師を入れなければならぬわけである。

右の歌の「すみたる」を「済みたる」であろうと解した上で味わうと、作者は進んで手入れをしないのに、庭師の仕事には満足できず、残された枯れ枝を剪るのである。

歌集にはこの歌に続いて、
縛られて引き寄せられて曲げられし庭木の枝をわが
解き放つ

が並んでいる。作者は庭師に細かな指示をすることはないのだろう。庭師は専門の職人として樹木の性質や全体の調和を考えて腕を振るうのであろうが、半ば自然のままの庭に慣れてきた作者はなじめないのである。そこで、おそらく何かを話しかけながら、枝に結ばれた縄を切つて自由にしてやるのである。その独り言は木への労りだけではなく、庭師への憎まれ口でもあっただろう。作者はこのような庭の歴史を振り返って、

閑庭といふ整ひはつひに無く八十年を棲み古りにけり

と詠んでいる。作者は専門の庭師の仕事を安易に許さないから結局統一感のない庭になっているのである。作者の造語かと思われる「閑庭」は、時に幻として脳裏に浮かぶこともあったのだろうか、「つひに無く八十年を棲み古りにけり」という嘆きにも似た感慨を抱くのである。なお、「閑庭」は見るからに静かに整った庭という意味であろう。

御津短歌の特徴の一つに「巧まぬ滑稽味」を私は挙げが、これはいずれ述べたい

「氷魚」のことから (221) 岡本八千代

庭の西隅にある小さな小さな竹藪の竹に今年初めて花が咲いた。雨が降れば雨にぬれてうなだれて。風が吹けば元氣よくそよいでいる。晴れればその空の下静かに枝垂れている。花は美しくない。黒かつ色だから。昔、父がクロチクとか言っていた。

さっそく、牧野富太郎著の「植物記」を開いて見る。「竹の花」の頁を読んでみた。

○「或る機会に促されて一朝花を着くるに至れば、敢て其程の老幼に閑せず。皆悉く花を出し、満枝一として花ならざるなく、花終て其稈遂に枯死に就くもの」とあった。ついに私とも永遠の別れなのか。生あるものどうすることもできないことか。

この寂しさのまま、またドナルドキーン先生もお亡くなりになった寂しさのまま、キーン先生の著書（新井潤美訳）を参考にして、今回は齊藤茂吉の歌を調べてゆきたいと思う。

○死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

I lie beside my mother

Who is close to death—

Piercing cries

Of frogs in distant fields

Echo from heaven.

○のど赤き文鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたま

ふなり

Two red-throated

Swallows perch on a crossbeam;

My mother who nurtured me

Is dying.

○木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時
たちにけり

When, under the tree,

I bite into a plum, how sour!

The time has passed

When my childlike bride

Used to blush before people.

茂吉は、子規の歌集に強い感銘を受けて、伊藤左千夫に弟子入りして、島木赤彦の跡を継いだのだった。明治41年（1908年）のアラragiの創刊号にも作品が掲載されたのだった。そして、茂吉の処女歌集は「赤光」（明治38年から大正2年に詠まれた834首の短歌）であった。そのうち実母を歌った歌だけで五十九首もあった。親への感動の深い心が歌われた。

また、「木のもとに」の歌は、長塚節は、「作者はこう言いたくてたまらなかつたであろう。そこに二つの無関のものもぎゅっと結びつけて放さない力がある」と言っている。

茂吉は精神科の医師として活躍をしている反面、何事に当たるにも深い心の優しさをもっていると思う。何事の怒りをやわらかい優しさに変えたいと思う最近の私であるが―。それが短歌の創作に生かされるか否か？

次号へ

編集室だより
二〇一九年四月

今泉由利

○漢詩吟クラスの勉強中「武関に宿る 李涉」武関 について
 だろーー商州にある関所。秦城 について 長安 のこと。万
 里 とは、万里の長城 〰 潺湲 〰 水の流れる様子。

万里の長城へは、出掛けて行つて、沢山歩いたことがある…見ゆる限りを續いていたけれど、そんなことで計り知れるものではない。趙、燕、秦…に渡り續く續く…石を積み、土を踏み固め…その果てしなく続く遙かな、果てしない情景を、自分の中に思い浮かべつつ吟じたい。こんなこと思っていたら、漢詩がよいとおしくてたまらなくなつた。

○駿河湾の、日本で最も深い海の底あたりの映像を見ていた。
タカアシガニとか、サクラエビとか……親しみ知る魚類のほかにはじめて出逢えた奇妙な魚達……。

ラブラとかの鰻、鮫、トウジン、バシヨウカジキ、ネズミザメ目メ
ガマウス科のメガマウスザメ、ミツクリザメ、ダンボ・オクトパス、
ダイオウゲンソクムシ。アンコウ系……。自分では、どうしよう
もないことを、いとも簡単に、映像と見せて下さる。見たこ
とも聞いたこともなかった生物にいつぱい出逢えて、自分も、
そのなかの二つ命と、しみじみ思うのだった。

○国指定名勝。三溪園へ、俳句の吟行。

明治時代から大正時代にかけて製糸、生糸貿易で財をなした五万三千坪の日本庭園。梅園は花が終ったばかり、小さな梅がなつていて、なんだかうれしくなる。

ユキヤナギ、サクラ、コブシ（白、紫、シヤガ、ヤマブキ（二重））スギナが筑山をおおっていたから、きつとツクシが生えたのだろう……と思う。手人のゆきとどいた清潔が、庭園の美しさをあとおしして、気持が良い。

○ゆがいてすぐいただける、たけのこが届いた。うれしくなっ
てしまい、外国にいる友人達にInstagramした。そして、
自分だけでいたっていました。

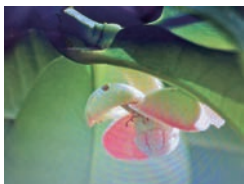
○品川区の八潮へ。旧くからの俳句の友人と昼食をしながら、
会わなかつた一週間の出来事、ことごとを話し……。すつき
りする。

そして、その「食堂」から近い所にあり、廃校を利用している仏像彫刻クラスにゆく。

ひのきにまみれゝ、パツパと払い落とし、そして、臨海線とか知らない間に出来ていた電車に乗つて、新宿の詩吟教場へゆく。一分の無駄のない時を過していると思ひ込んでゐる。

○北区図書館のドナルド・キン先生コーナーより、「百代の過客」「百代の過客（続）」「芭蕉 英訳」をお借りしている。思いがけないことを沢山教わっている。ありがとうございます……の思いにつつまれる。

野菜・まんだら (16) マンゴスチン オトギリソウ科 フクギ属



- 原産地・スダ列島、マレー半島周辺。
- 高温多湿の熱帯気候を好む、常緑高木。果実が実るようになるのに10年以上要する。
- 果実は、ビタミン、ミネラルバランスが良く、たん白質、鉄分、カルシウム・・・人間に欠かせないものを多く含む。果汁が多く、香り高く、甘味と酸味のバランスが良い。
- マンゴスチンの皮に含まれる、赤い樹液の色素は染料になる。
- 果皮に含まれる“キサントン”には、強い抗酸化作用があり、癌を抑制する効能、整腸作用、感染の予防、老化予防、などなど。果皮を粉末にするお茶は、抗酸化作用、アンチエイジングに効果的。
- 少し前になるけれど、仕事という名目で、よくアジアの国々へ行くことがあった。ホテルの部屋に着くと、果物が山盛りに置かれてあって、その豊富な熱帯の果実に夢中になった。トロピカルフルーツの女王といわれ、世界の三大美果ともいわれるマンゴスチンは、丸い果実のまん中あたりに切れ目が入れてあり、ふたをとるように開けると、みかんのような4～8の房にわかれた乳白色の姿、香り、多汁、上品に甘く、その清涼感。こんなに美味しいものが、この世にあったのだ!

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。